昭和47年３月
秋田県文化財調査報告書第25集

昭和４６年度

金沢柵跡発掘調査概報

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会
横手市教育委員会

序

本遺跡の調査は，本年をもって第５次を数えます。史上名高い金沢柵と擬定されて久しいのですが，５次にわたる調査をもってしても，その確証は得られなかったのであります。しかしながら，本遺跡の性格については，調査員の方々のご努力により，漸次明らかにされて来たのであり，金沢柵としての確証は得られなかったにせよ，その成果を否定するものではないのであります。

本遺跡の発掘調査は，本年をもって一応終了することになりますが，金沢柵としての確証を得るまでには，今後，相当期間の年月を必要とするでありましょう。このことについては，地元横手市ともども，今後の課題として，検討してまいるつもりであります。

本書は，本年度分の調査結果をまとめたのでありますが，研究者の参考になれば幸いであります。おわりに，長年の間，本発掘を担当された調査員の方々，ならびに関係者各位に深く感謝の意を表するものであります。

昭 和４７年３月

秋田県教育委員会

教育長　伊　藤　忠　二

目　　次

第１章　発掘調査に至るまでの経過……1
　1　発掘調査の経過概要……1

第２章　第５次発掘調査……3
　1　調査の構成……3
　2　調査日誌……4
　3　各地区の調査概要……6
　4 出土遺物……7

第３章　総　　括……10

図・図版目次

第１図　本丸地区全体平面図……11
第２図　Ｂ地区平面図……13
第３図　Ｃ地区南壁，東壁断面図……14
第４図　木製品実測図……15
第５図　〃……16
第６図　金属器，石製品実測図……17
第７図　木　　簡……18
写真 第１図　Ａ，Ｂ，Ｃ地区……19
第２図　木　製　品……20
第３図　金属及石製品……21
第４図　墨　　書……22

第１章　発掘調査に至るまでの経過

１．発掘調査の経過概要

（イ）第一次予備調査

昭和39年横手市教育委員会の企画によって，８月５，６，７日の３日間の発掘調査が実施された。実施地域は通称「本丸」と云われているところで奈良修介，豊島昂によって発掘がおこなわれた。この「本丸址」と称される高台は南北を長軸とする。従ってトレンチは南北線上に設定した。調査の結果はトレンチ北側で多数の柱穴が発見された。（註１）またトレンチ南側の一部に黒色のやわらかい一見攪乱層と思われる部分があった。（註２）

註１　第二次調査で板橋源氏が「櫓」址と認定した柱穴と，第四次調査で確認された大きな建造物の柱穴等の一部が当時検出された。

註２　本丸の南東部にみられる埋立て地とみられる個所である。

（ロ）第二次発掘調査

秋田県教育委員会と横手市教育委員会が主体となって，板橋源，奈良修介の両氏等により調査が実施された。実施期間は昭和40年７月22日より８月２日までの12日間であった。調査対象地区は「北の丸」と「本丸」の二個所である。

「北の丸」「五間に三間」の母屋に，北東部と北西部の一部に張出しのあるもので，基壇や雨落溝はみられない。

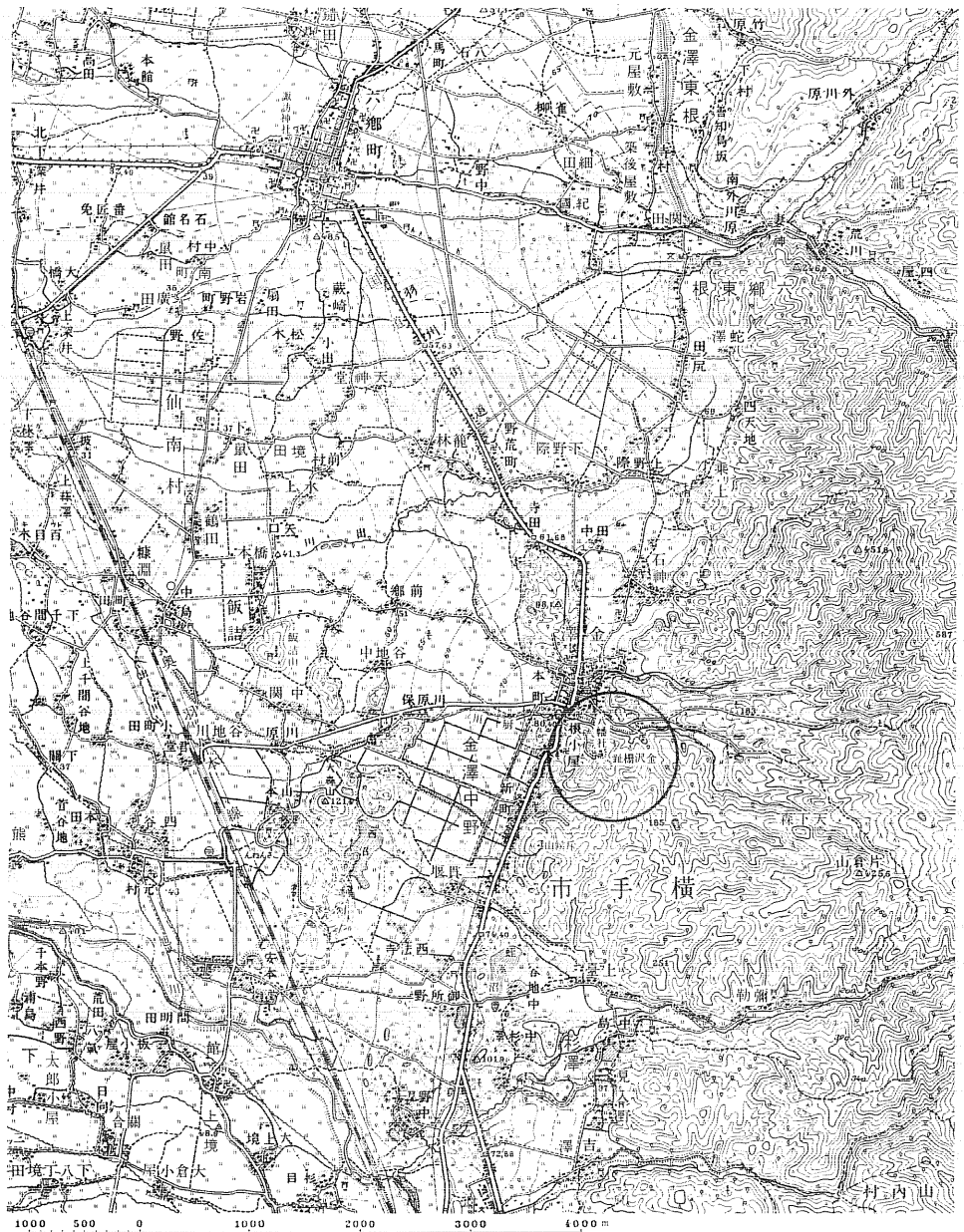
「本丸西南隅」四脚高楼の櫓址の掘立式柱脚とされる柱穴が発見されている。

この調査によって後三年の役の単なる戦場であったのではなく，建物址の発見から城とか舘とかよばれるにふさわしいものであった。――とこの遺跡の重要性がまして来た。

（ハ）第三次発掘調査

前回と全く同じ調査組織をもって，昭和41年７月25日から８月３日までの10日間の発掘調査が実施された。三次調査の発掘は，通称西の丸と呼んでいる地域である。更に三区に細分して発掘調査が進められた。調査の結果それぞれの地区で建造物址を検出している。北の丸同様に「五間に三間」の母屋，更に四面に縁か廂付の建物であった。

（ニ）第四次発掘調査


金澤東根
鄉町
仙南村
金澤中野
横手市
1000 500 0 1000 2000 3000 4000 m

第三次調査以降丸三年の空白の期間を過ごし，昭和45年８月１日から第四次発掘調査として調査が実施された。調査地域は所謂本丸址に限られた。結果は東端張出しの部分に「櫓」が検出された。更に北部からは南北四間×東西五間の建築遺構と建物の外に竈址も発見された。また南の土塁と東の張出し間にかって石垣があったとの情報に調査を進めた結果厚さ１mの「石垣」を発見した。前回の調査から引き継いだものに現在本丸西側の通路上に何らかの施設の有無であった。調査の結果施設の設置は不明確なものであった。

（ホ）第五次の発掘地点は，前回同様本丸址が対象である。今調査の主なる目的は，埋立て地と目され，これまで木製品及び陶磁器等の日常用器を出土している地域を更に深層部まで掘り下げて，金沢の柵の年代に近づける資料を検出することである。

第２章　第五次発掘調査

１．調査の構成

１　発掘調査の主体

秋田県教育委員会

横手市教育委員会

２　発掘調査期間

昭和46年８月３日 ～ ９日

３　発掘調査の場所

横手市金沢町　　本丸地区

４　発掘調査員等

発掘調査員	秋田県文化財専門委員	豊島　昂
発掘調査補助員	秋田市高清水小学校教諭	岩見　誠夫
	秋田大学ＯＢ	畠山　憲司
発掘補助員	横手高校生徒	
	横手城南高校生徒	
発掘事務担当	県教育庁社会教育課文化係長	吉川　欣一
	〃　主事	伊藤　茂雄
	横手市教育委員会社会教育課長	佐藤　弘
	〃　社会教育主事	堀江　彰
	横手市金沢支所長	伊藤金之助

2．調　査　日　誌

8月3日　（火）　晴

午前11時，横手市役所2階会議室に県社教吉川係長，伊藤主事と調査員豊島の3名集合す。横手市社教係長を加えて本年度調査の打合せを行う。昼食後ちょうど開催されていた横手市教育委員会に挨拶に出る。午後1時現場において市長，教育長出席のもとに鍬入れの神事を行なう。

横手高校生　10名，城南高校生　7名，引卒横手高校　榎　　先生

発掘開始午後2時30分，

Aトレンチ

北の丸への通路に3m×5mを設定

Bトレンチ

伊藤翁碑の前に2m×10mを設定

共に芝生を取り除く。

8月4日　（水）　晴

Aトレンチ

前日に引き続き除土，遺構の検出にとりかかるも不確実な個所があって更に東に延長して遺構の検出を急ぐ。砥石と鉄製品の一部を出土した。

Bトレンチ

前日の芝剝ぎに引き継き除土，堀り下げ30cmで基盤上部に到達す。伊藤翁碑前に近いところより柱穴群を検出，全面精査の結果二か所の木炭片（粉炭状）の推積がみられた。また西側に拳大の石のかたまりがあった。

Cトレンチ

前回調査のE地区の東に設定した地区である。設定目的は，今回の主眼でもあるこの遺跡の上限と下限を知る資料を泥炭層から求めようとするものである。2m×12mを設定，約80cm程の掘り下げで磁器片が検出される。青磁，白磁，天目，その他須恵器長頸壺の頸部があった。一部掘り下げ2m地点からモミガラの堆積がみられ，この層を境にして以下は泥炭層となる。この泥炭部より黄瀬戸片を出土す。明日奈良修介先生の来跡不可の連絡あり。本日も横手高校，城南高校生の応援があった。又城南高校佐々木順誠先生もみえられた。

8月5日　（木）　晴

Aトレンチ

前日からの精査によって一見階級状の遺構が検出された。

Bトレンチ

前日の柱穴の状態から，南北に拡張し除土を続ける。

Cトレンチ

初め2m巾のトレンチであったが，前回までの調査から深さが2m以上になるため，安全を確保する意味もあって更に北及び東に2mの拡張した。全面掘り下げをおこなう。青灰色粘土層上面より砂岩質の石製硯一面が出土した。

午後3時30分豊島出校日及教科課程講習会出席のため秋田に帰る。尚6，7日の作業は，Bトレンチは柱穴の確認，Cトレンチは泥炭層上面までの掘り下げ等を指示する。

8月6日　（金）　晴

前日の指示に従って作業を進める。

8月7日　（土）

午後豊島秋田から来る。岩見誠夫氏応援に来た。さっそくBトレンチの掘り下げをおこなうが，雨足が繁くなる。泥炭質の遺物層となって，上部はモミガラの堆積が多くみられた。遺物は焼けあとの付いた用材の破片，木炭――明らかに木炭として製造されたと用われる硬質の木炭片，箸やその他木製品の破片が大量に出土した。午後3時念願の墨書木管二点を出土す。

8月8日　（日）　雨のち晴

昨夜来の雨が，夜明けとともに雷雨となり午前中作業は中止の状態となる。午後ようやく雨もあがりCトレンチの水の掻き揚げを行うが，周囲から染みでる水と壁面の剥落が多くなり作業は思うように進まず。泥と水のため遺物の検出が思わしくない。前日に続き二点の木筒を検出す。尚Bトレンチは今日実測図作成と平行して柱穴の深さを確認する予定であったが，午前中の雨で作業は中止す。岩見氏帰宅。見学者多数あり。畠山氏（秋大OB）応援のため残る。

8月9日　（月）　晴

最終日となる。Bトレンチは表面の乾き次第柱穴の深さ等の確認を急ぐが思うように進まない。同様にCトレンチも浸透水が多く作業は進まないが，畠山氏の応援で壁面の断面図の作成を急ぐ。一方これまでに出土した遺物の大別を行う。午後からは今次調査の概略を各報道機関に発表す。Bトレンチの実測図は間に合わず後日，金沢支所の伊藤金之助支所長及び職員と横手高校考古班の応援を得て実施することに決める。

3．各地区の調査概要

A　地区　（第１図参照）

伊藤翁碑の前から北の丸又は八幡社に至る通路で，前回調査のＡ地区と相対する位置にある。前回調査のＡ地区において，本丸への出入口についての遺構がきわめて不確実な推定の段階にとどまった。今回の調査目的は前述のように相対する位置にある東側の通路上に出入口施設その他の遺構の有無を確めるのである。

調査の結果は通路降り口附近ではわずかながら階段状のものがみられる。これとて階段と断定するには無理がある。建造物の遺構は見当らない。ただこの地区の南端は通路上にあって軟質凝灰岩が露出している。精査の結果，小さな柱穴や雨落ち溝様のものが検出された。附近を探査の結果それらの伴うべき他の遺構を見ることが出来なかった。この地区の中央部で，現通路面から約50㎝の深さが基盤層となる。その基盤層上から小型の砥石と，馬具の締め金具と推定される鉄製品が出土している。

B　地区　（第２図参照）

伊藤翁碑前に東西線上からやゝ南に偏って巾 3.5ｍ，長さ13ｍのトレンチを基本としその後北側に約５ｍ，南側に２ｍとそれぞれ拡張した。その結果柱穴群は調査地域の北側に多くみられた。更にこの柱穴は東南から西北に軸をとっている。この軸は第４次調査のＢ地区で調査した建物の奥行きの方位とほぼ同じである。各柱穴を細く観察すれば最低二回の改築が，又場合によっては３回の改築も考えられるが，あまりにも柱穴の錯綜が激しく建造物の推定は困難である。強いて言えば柱間一間～せいぜい二間の「廊」のようなものの東端と考えられる。これが前回調査のＢ地区の建物に直接関係もつものか，又はその間にもう一つ別の建物を仲介するのかは不明である。単に距離的にのみみれば，その間約20ｍ程を数えることができる。従って間に他の建物があってもさしつかえないと考える。その他，この調査地区内で柱穴とは逆のほぼ南側には焼土や木炭片の堆積している部分がみられた，それがａ～ｄまでである。

ａは長経約2.5ｍ，短経約1.5ｍの楕円状をなして幾分か窪みとなり，中に拳大の石が置かれ赤く焼けただれて「炉」を思わせる。小型の砥石１個出土す。

ｂ～ｄは木炭片の堆積がわずかに見られ，地面はほんのわずか焼け「箒」のあとに考えられる。

以上のように柱穴群の部分と，他のところとは割合明確に区分されている。本丸全体からみても中央広場の存在が推察し得る位置である。

C　地区　（第３図１，２参照）

本丸中央よりやゝ東寄りで，ごくゆるやかに東側に傾斜している地域である。ここは第一次

第二次，第四次調査とかなり手が入っている。これまでの調査では深く喰込んだ東側の谷の一部が何時かの時代に埋め立てられたものであることは知られている。又これまでもこの地点からは多くの陶磁器や木器が出土している。今年はそれらの事実をふまえた上で，更にここを調査する。トレンチは巾4 m×長さ10 mを基本とし一部では巾2 m×長さ16 mとなっているところもある。堀り下げでは，西側は表土を除土すると原地形（基盤層）の東側に降る斜面があらわれる。斜面の一部から底にかけて基盤の上に黒色粘土のような泥炭質の地層がみられる。この層中にも若干の遺物もみられるが，遺物がもっとも多いのはこの層の上に植物遺体の堆積している層があって，遺物はこの層中に多く包含されている。この層にみられる植物遺体は蕨の枯れたものが多く，それに混って籾殻が厚く堆積している。この遺物包含層全体をみれば，上層には用材の焼け端が多く，下層には青磁片や塗り椀，箸などの什器類が多い。この遺物包含層を覆うように凝灰岩（金沢石）の捨て石されている。この捨て石の上からも若干の遺物はみられる。この層の上には褐色粘土層が幾層かになって埋め立てられている。この埋め立ては深いところで，表土から基盤層までおおよそ2.2mを数える。出土遺物の内木簡は深さ2.1 mの基盤直上から，また硯は捨て石の直下の包含層上端からそれぞれ検出されている。

4．出　土　遺　物

出土遺物の大半はC地区から検出されたものである。遺物は陶磁器，木器の他に植物遺体も沢山みられる。

（イ）植　　物

発掘概要C地区でも述べたが，植物遺体の堆積層があって，その層の中心になる植物は蕨である，その蕨も夏以後のどちらかと云えば秋の枯れた状態のものであった。それに混って，桜楢と，葉のついた檜，杉もみられる。又明らかに木炭としてつくられたと考えられるものもある。材質はブナとイタヤである。

種子で検出されたものに，胡桃，桃と，熟れたからすうりがそのまま落ち状態で検出されている。これら検出されたもののうち蕨や籾殻の堆積の状態から，この高台が使用された初期の頃にはこの谷間は「くず捨て場」として使用されていたと考えられる。

（ロ）用　　材

焼け端の建築用材は捨て石の直下に多くみられる，材質は檜，杉が多い。

（ハ）木　製　品

箸状の木器が沢山出土し，材質は杉又は檜と竹が若干みられる。

1　巾7.5cm，厚さ0.9cm，長さ15.5cmうち歯の長さ 3.3cm織機の部品で，おそらく縦糸の乱れ

を正すのに使用したものと考えられる。

2　箆状木製品で長さ14cm，先端の巾広の部分で 1.5cm，他の一端は細く整形されている，作りはきわめて薄く出来ている。

3　前記２と同じく箆状のものである，長さ11.7cm，巾3.2cm，厚さ0.3cm

4　鋸歯状の山形が連続して切り込んである。長さ26.3cm，巾1.4cm，厚さ0.5cm，両端は両側から削ってある。

5　曲げ物の底と考えられるもの，径13.3cmで円形と云うよりも隅丸的な円形を呈している。

6　円形よりはやゝ楕円の原型を考えられるが，半裁されている。短径 4.4cm，現存長径11cm，曲部に近く0.4cmの孔がある。厚さは0.5cmを数える。

7　径約 9.2cmの円板であるが，一辺６cmの正三角形の頂点にあたる部分にそれぞれ二個づつの小さな孔が穿かれている。

8　径約5.2cm，厚さ1.4cmで，樽の栓状のものである。

9　塗椀，口径9.5cm，高さ2.5cm，糸底径6.7cm，外側は黒塗り，内側は朱塗りで全体火を受けているため，口縁の約５分の１は失われている。

10　舟型で，長さ7.2cm，最大巾1.4cm，最小巾1cm，厚さ0.6cm中にくり抜きがある。

（ニ）金　属　器

銅製品で，共に火をうけただれている。一つは飾り金具と考えられるが，他の一つはその用途は不明である。A地区から鉄製品も出土している。

1　長さ7.6cm，巾1.2cmで，一端は山形に整形され，他の一端はたたきつぶされた形跡がある。

2　２cm×３cmのやゝ長方形で，金銅製のような光がある。

3　鉄製品（A地区）

錆びによるふくらみが多く確かな形状は測りがたいが，その形状から馬具の締金具の一つとみられる。

（ホ）石　製　器

1　砥石

1.8cm×2.3cmに長さ9.5cmの小型のもので完型品とみられる。四面を使用している。（A地区）

2　砥石　1.0cm×2.5cmで，現存する長さは6.5cmである。四面を使用している。

3　砥石　ごく小さい破片で，３cm×2.5cm×３cmで，六面ほど使用している。

4　砂岩製で二点あるが，用途を推量出来ない程の小破片である。

5　硯　7.6cm×5.8cm，厚さ約2.5cm，砂岩製の硯で，材質にもっとも適さない石材を使用していると云える。硯面は楕円形で，長径5.3cm，短径3.7cm，海の深さは0.5cm，海から硯の先端かけては墨液の染みがみられる。

上記の他に石鉢の口縁部の破片も検出され，これまでも掘り出されている。

（へ）陶　磁　器

陶磁器については前回第四次調査の報告書で，小野正人氏が出土陶磁器のもつ意義について詳細に述べている。出土したのは前回同様，須恵器，古瀬戸，青磁，白磁，天目，黄瀬戸等であるが，いづれも小破片で古瀬戸の一点だけは図上で復元出来る。

1　須恵器

大型のカメに多く見られるが，口縁部は直角に外反し，古瀬戸の口造りで玉縁状と云われるものに極めて類似している。

2　古瀬戸

全体的にみると極めて粗雑な作りである。形状は浅い坪型のものが多い。図上復元出来るものも浅い坪型である。

3　青磁

中国からの将来品であることは云うまでもないが，小野正人氏の御教示によれば下記の窯で製作されたものとの事である。大半は茶碗で，一点だけ袴腰香炉の脚が検出される。

郊壇窯

竜泉窯

4　白磁　定州窯

と中国，南宋時代に盛行した窯で作成されたものである。この他に天目茶碗や室町時代に盛行した黄瀬戸等がある。出土状況は，天目茶碗や黄瀬戸が深いところから出土している。

（ト）木　　簡

これまでの調査でも木簡ないしは墨書きのある器物の検出の可能性はあったが，今回の調査で初めて見ることができた。4点あるがうち2点は梵字の種字が記された小さな塔婆である。

1　長さ21.5cm，巾1.5cmの薄い板 ― 経木でつくられた板塔婆とも云えるもので，上部は将棋の駒の頭と同じように整形されている。又下部は何かに挿し立てられるように足長に削られている。種字は五字で大日真言の一つと考えられる。

2　巾1.6cm，長さは現存分で14.9cm，前記1とまったく同じである。

3　1.8cm×4.9cmの小さな木札で「二連」と記され，対のものを数えるに用いられる。

4　途中で欠けているので銘文全体を知ることが出来ないのは残念である。巾1.6cm，長さ6.7cmで上部には紐をつけるための切込みがある。これとまったく同じものが，一乗谷朝倉館跡から発見されている。※

※　考古学ジャーナル　No.59　1971－8月号

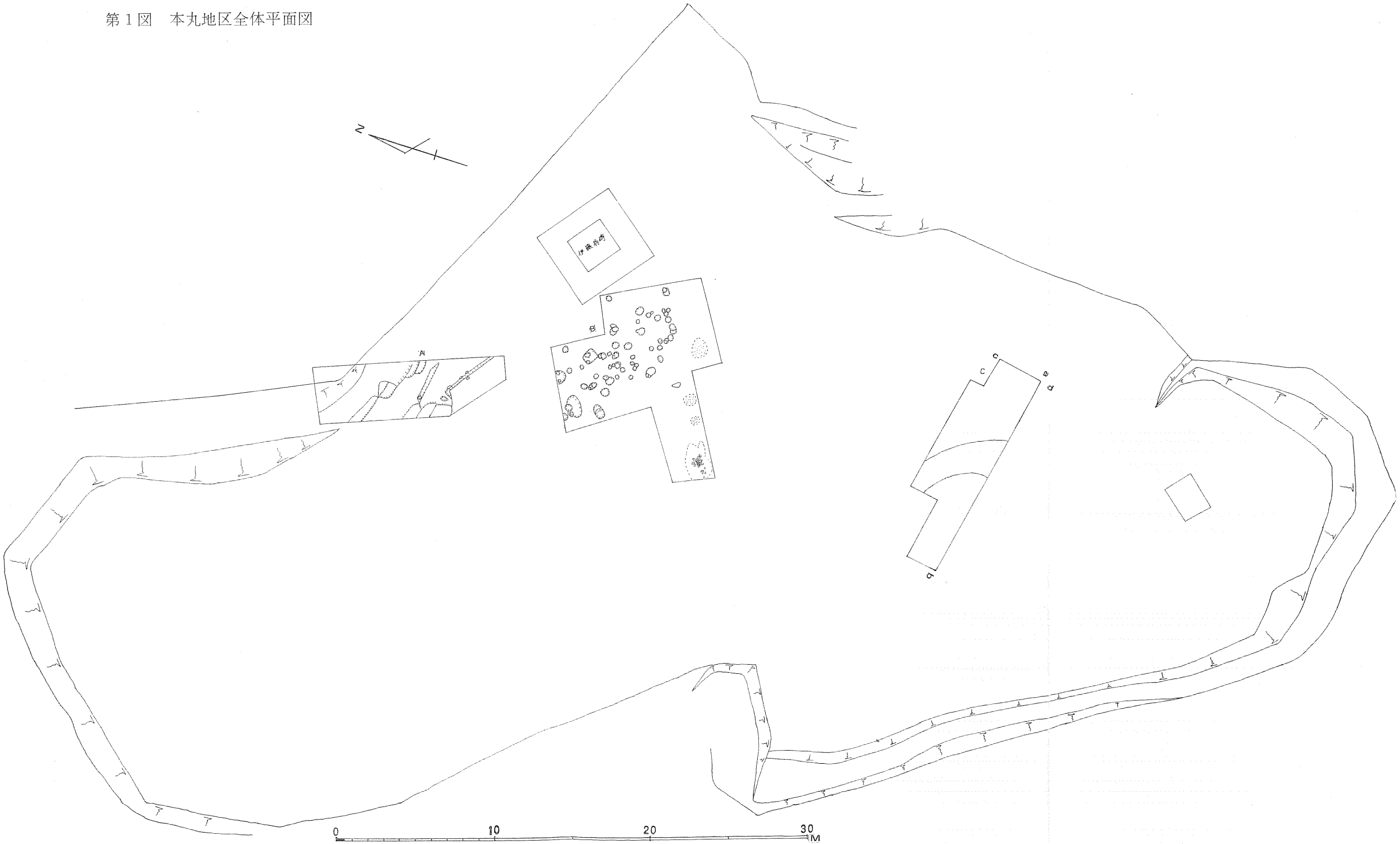
田中哲雄，石松好雄　「一乗谷朝倉館跡の調査」

第3章　総　　括

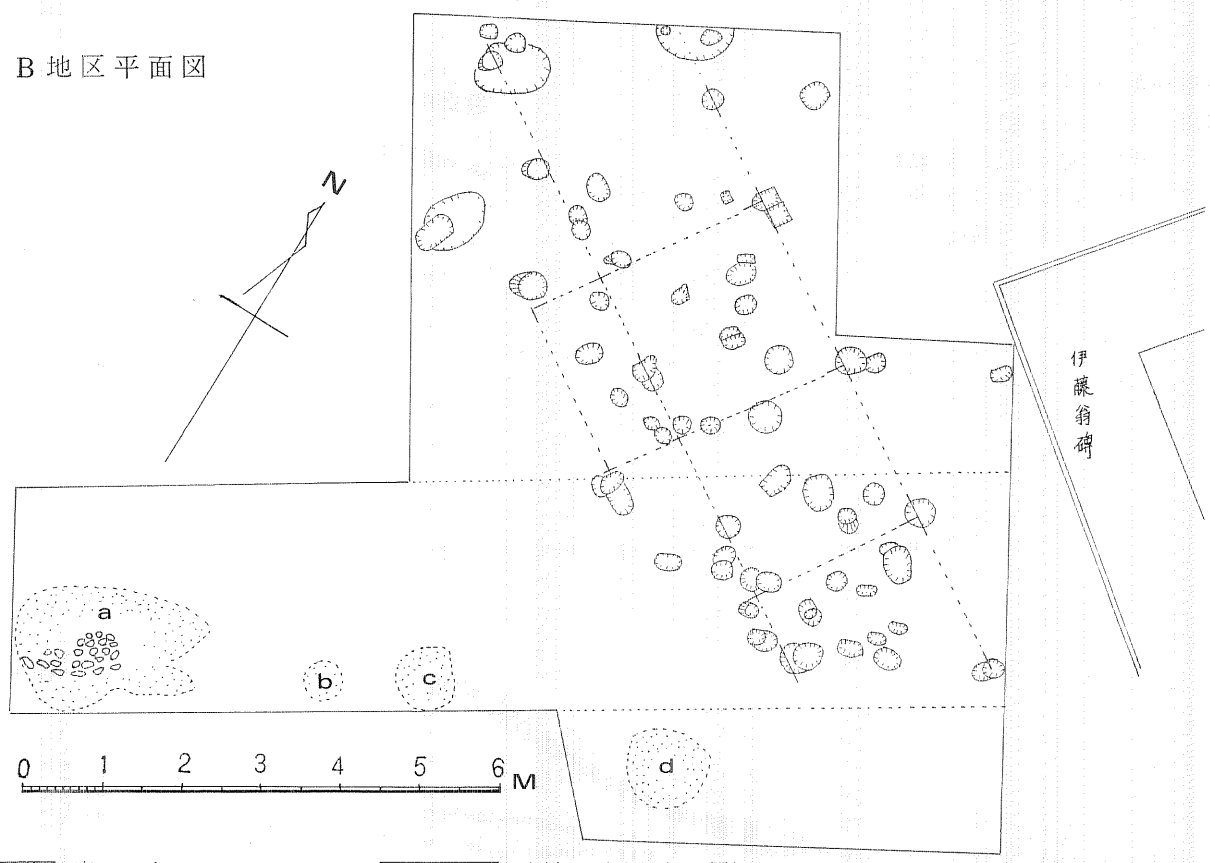
総　括・考　察

今年度の調査を最後に調査は完了したとされるが，それはあくまでも行政的な段階での事務処理上の事であって，決っして金沢の柵が解明された訳ではない。むしろ様相が複雑化して来ていると云えよう。前回以来本丸址出土の陶磁器に焦点をしぼって時代推定の手がかりを得ようとした。前回の報告書で，小野正人氏は陶磁器から推して小野寺氏入部以後と述べている。今回の調査でも下層の植物遺体の多く包蔵されている層と基盤の間に堆積する籾殻の中から黄瀬戸や天目茶碗の破片が出土している。又出土する須恵器なども鎌倉期の古瀬戸の手法がみられる。以上のような事からこの地がもっとも整備され盛行したのは鎌倉時代末から室町時代と推察される。従って清原氏の居館の址とは考えられない。ただし居館を現在の金沢の町中に求めて，いざ戦争の時代だけの防御地であれば，それほど立派な建物も，日常什器も必要なかったものと考えられる。前回にも述べたが柵木の調査が必要であろうし，墨書されたものが出土したことによって，埋立ての谷間を精査する必要が生じたものと考えられる。と云うように調査はまだまだ解明して行かなければならない問題をかかえている。やっといくらかづつ調査のめどがついて来たのである。

第１図　本丸地区全体平面図



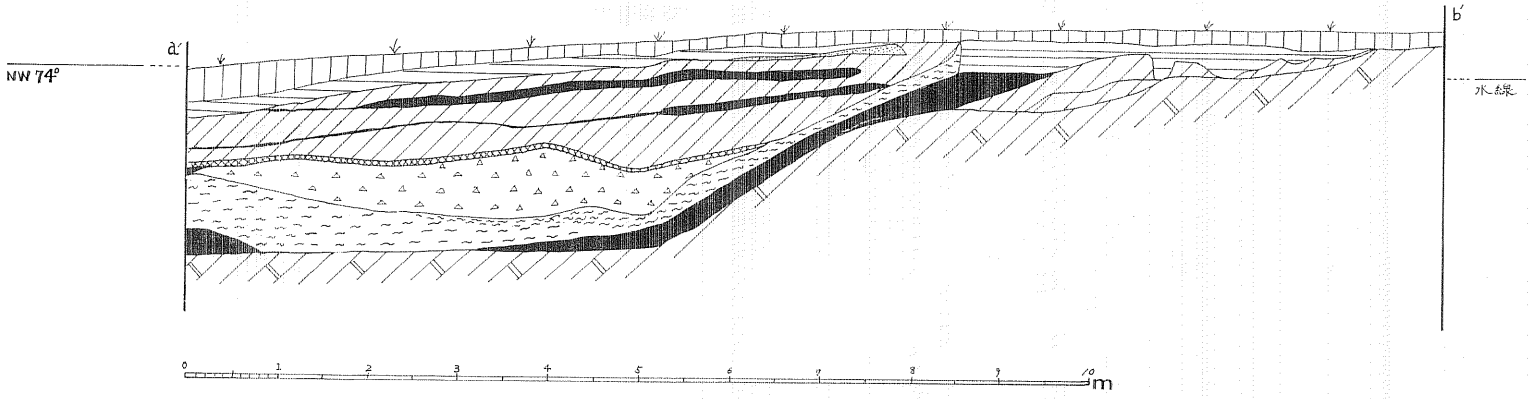
第2図　B地区平面図



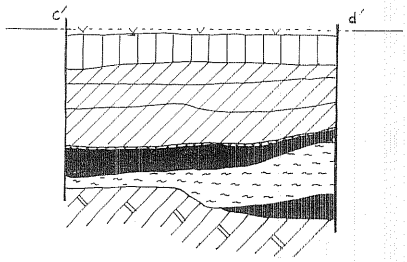
1 表　土
2 褐色土
3 黄褐色粘土
4 黄褐色酸化鉄含有粘土
5 凝灰岩（捨石）
6 腐植土（遺物包含層）
7 黒色粘土
8 赤色粘土
9 基　盤

B地区　平面図
実測者　豊島、伊藤（金沢支所）
高橋、梅川、佐々木（横高生）

第３図　1.　Ｃ地区南壁断面図

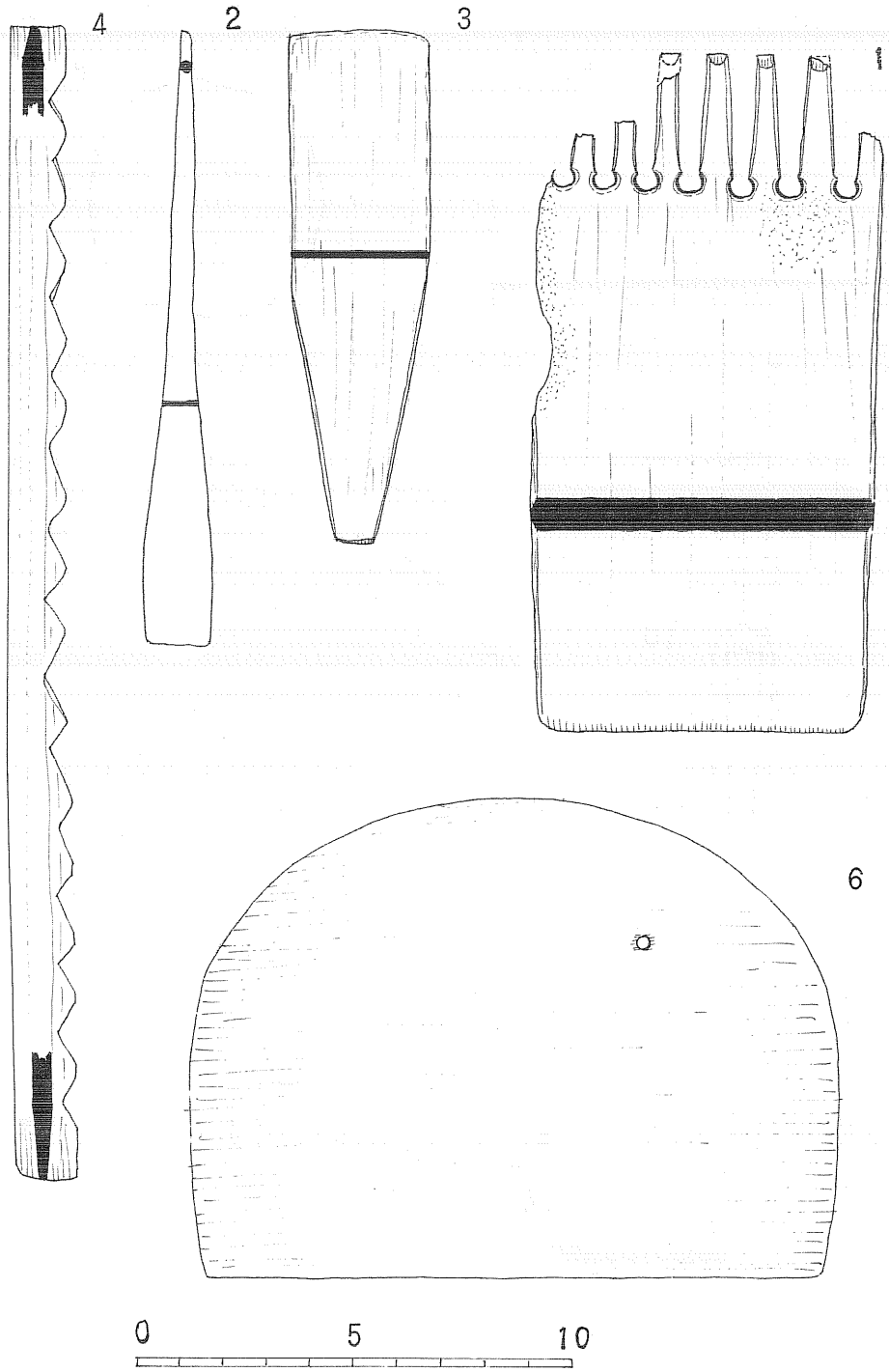


2.　Ｃ地区東壁断面図

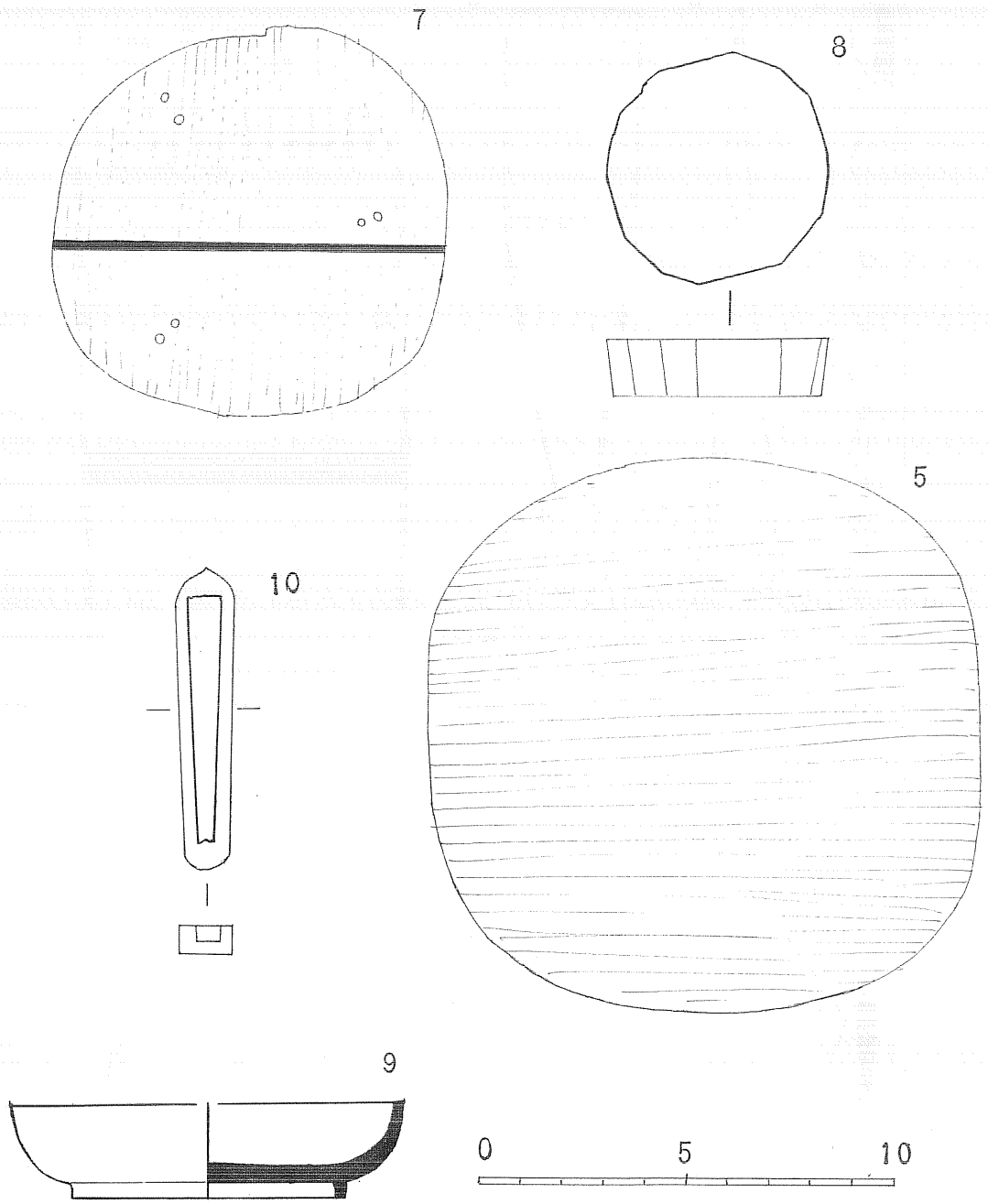


Ｃ地区　南壁断面図
昭和46年８月９日　作成
実測者　畠山（秋大ＯＢ）
遠藤・及川（横手高）
大倉・木曾（城南高）

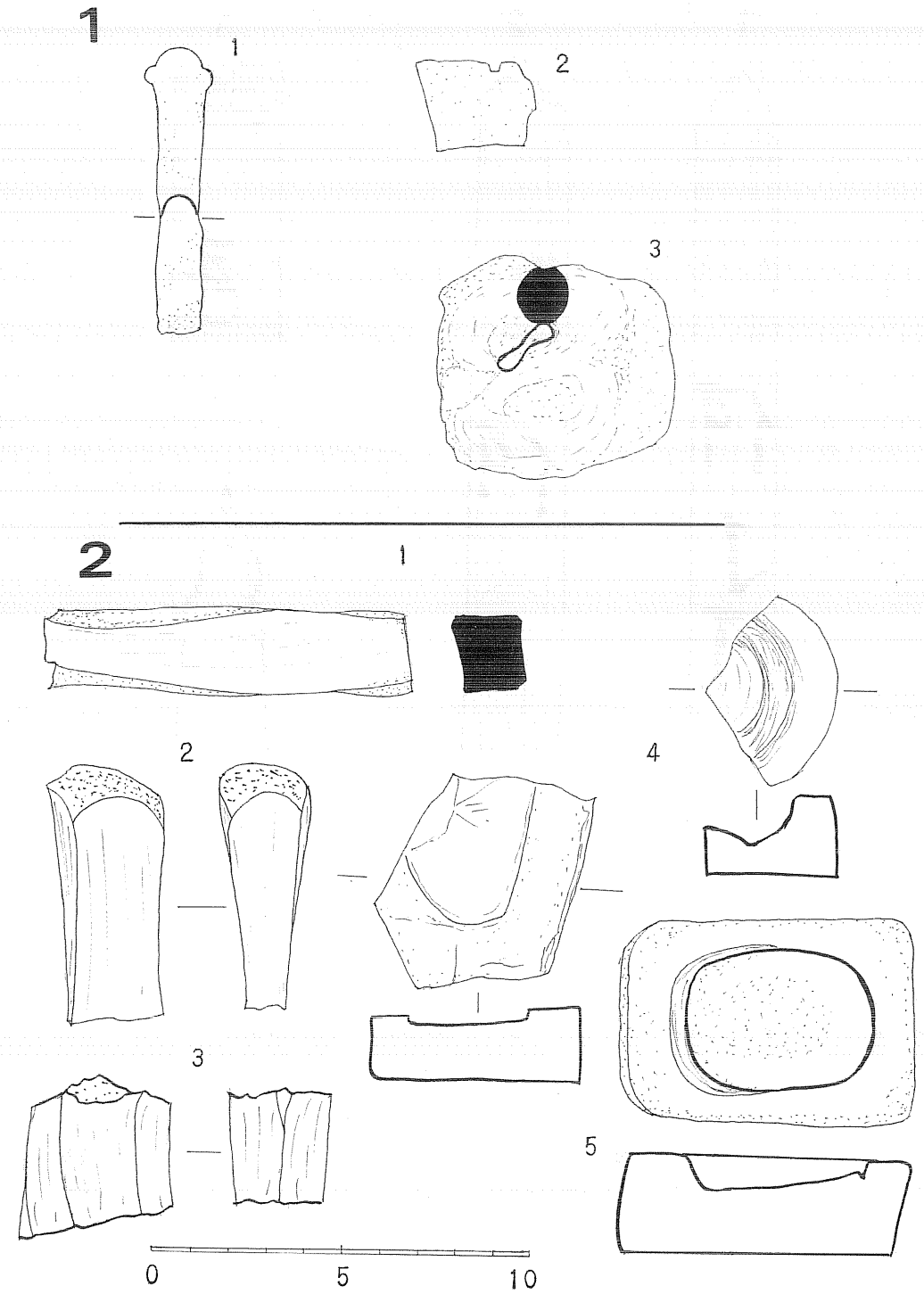
第4図　木製品実測図



第５図　木製品実測図



第６図　金属器，石製品実測図



第７図　木　　簡

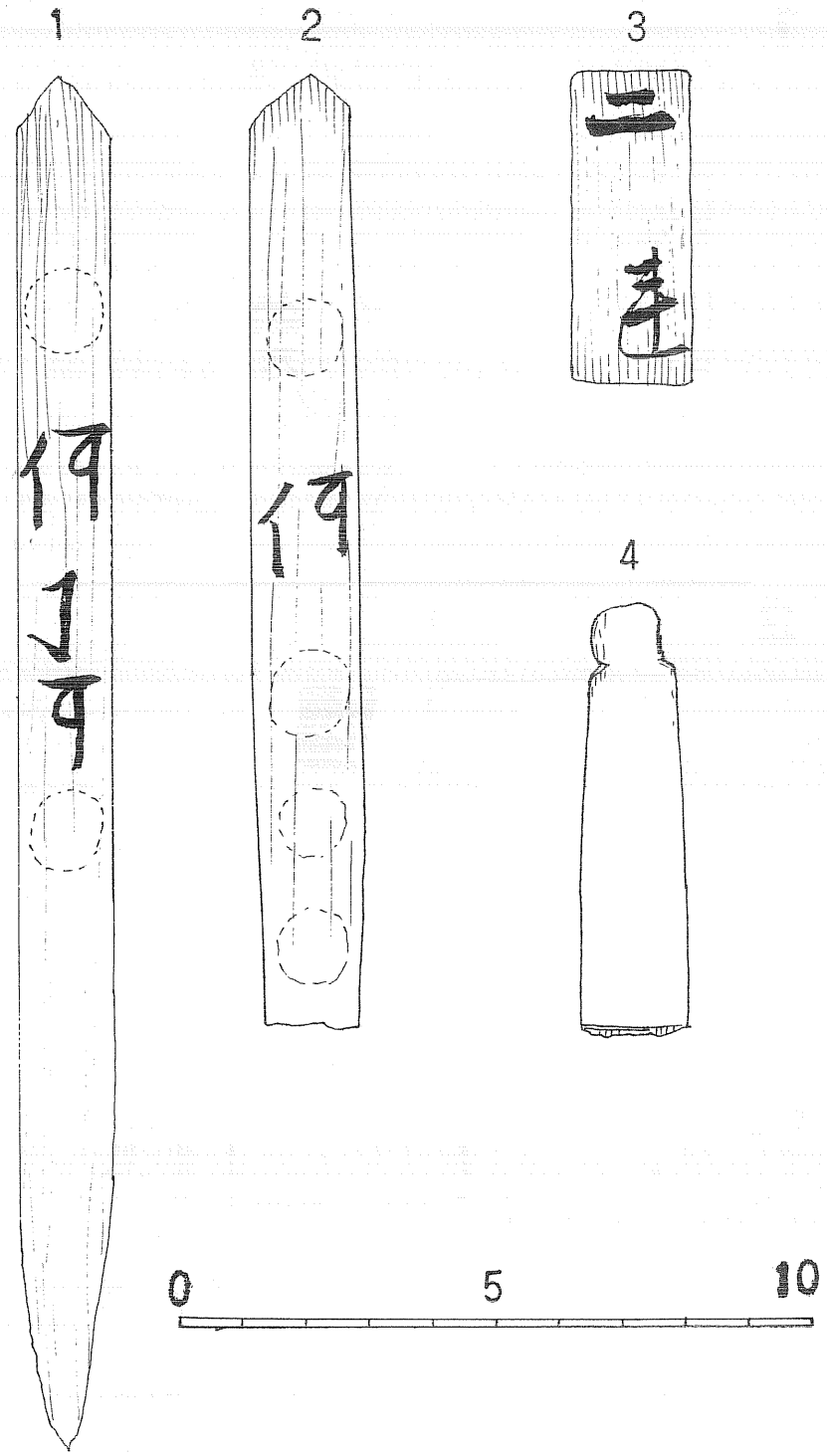


写真　第１図

1.　A地区

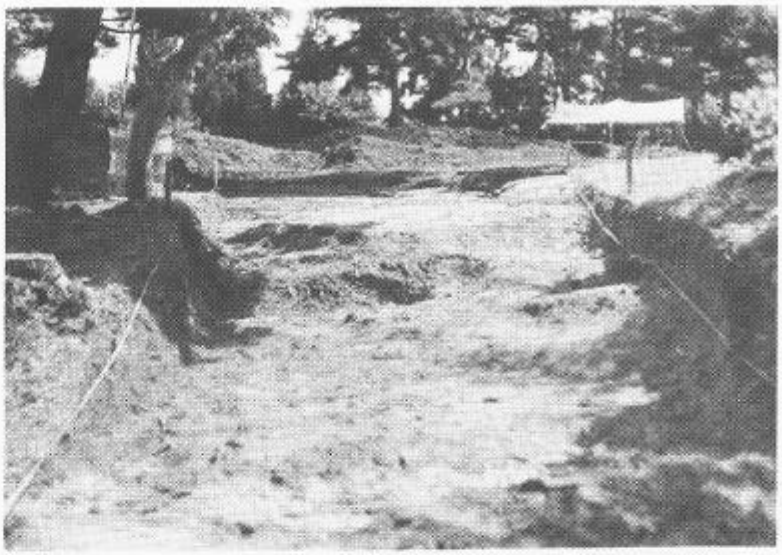
北から発堀地点を望む

2.　B地区

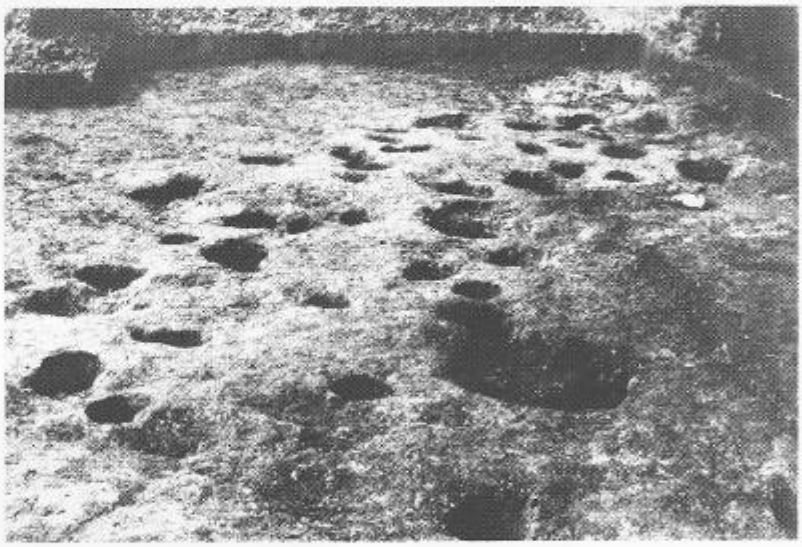
東より柱穴列を望む

3.　C地区

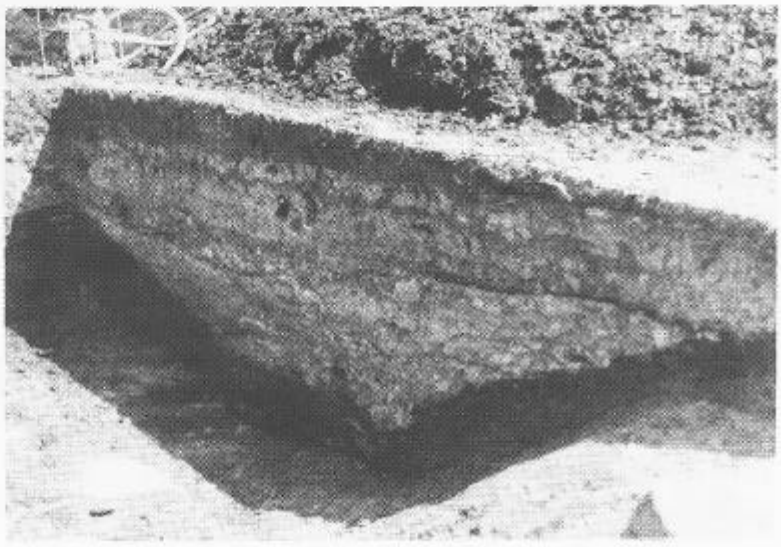
南壁の断面



1

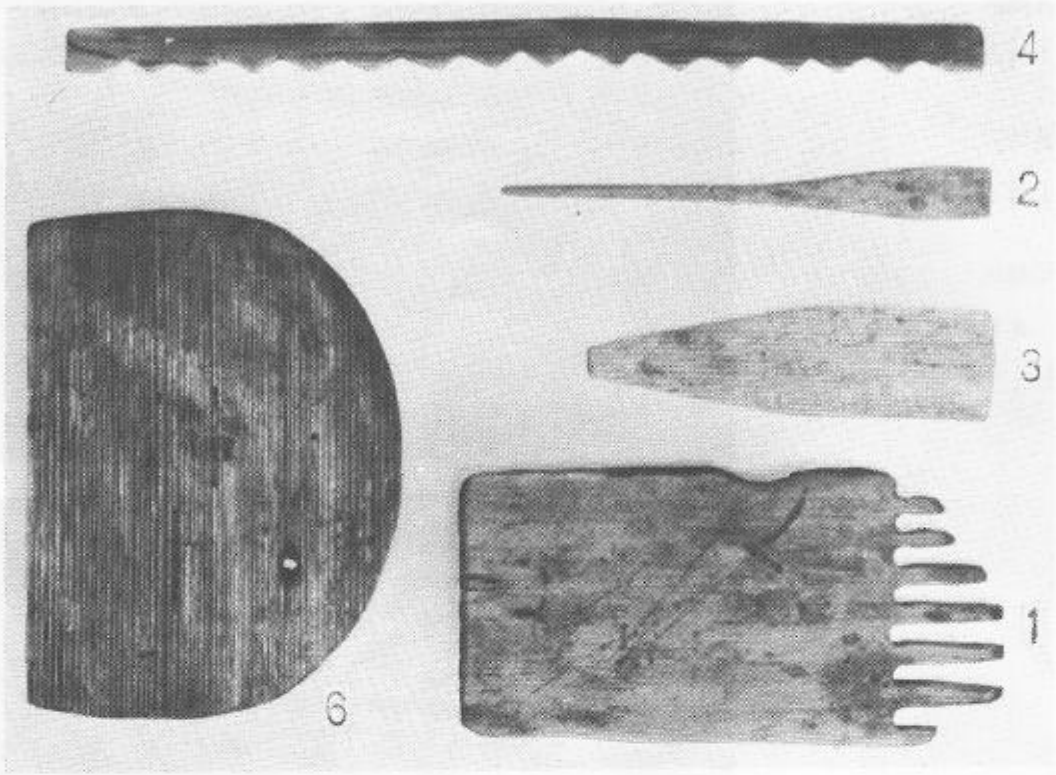


2



3

写真　第2図　木　製　品



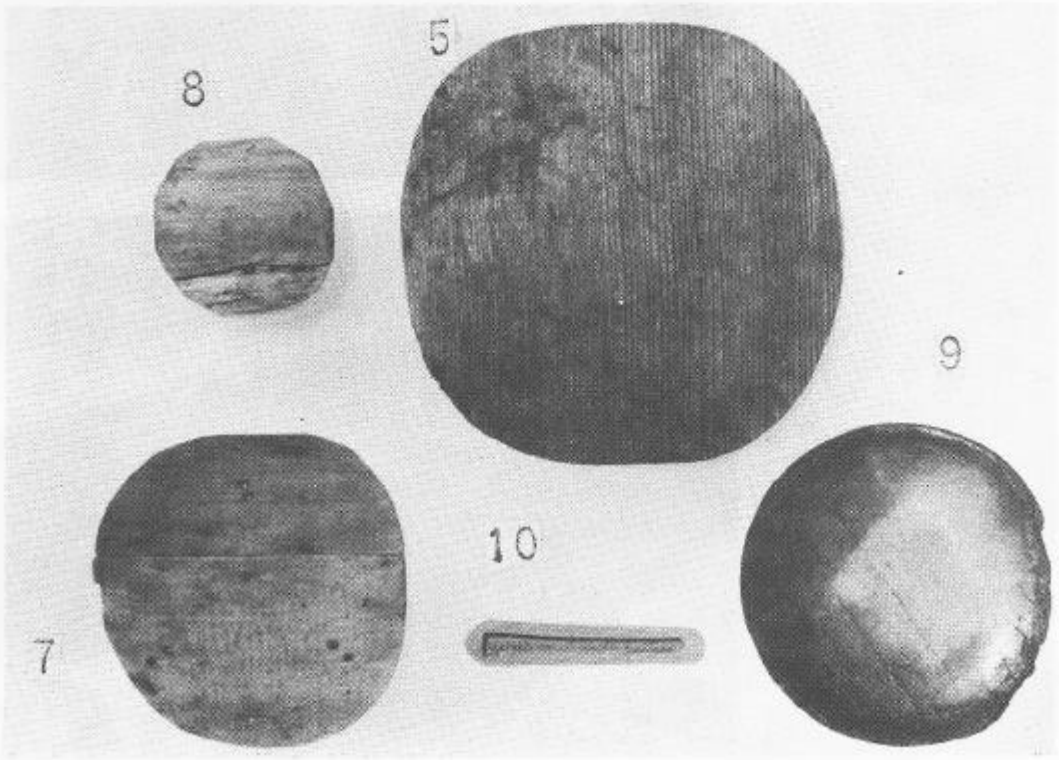
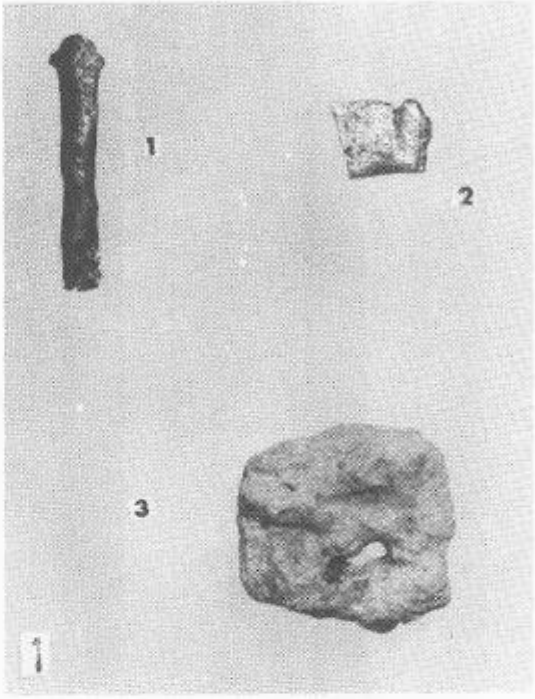
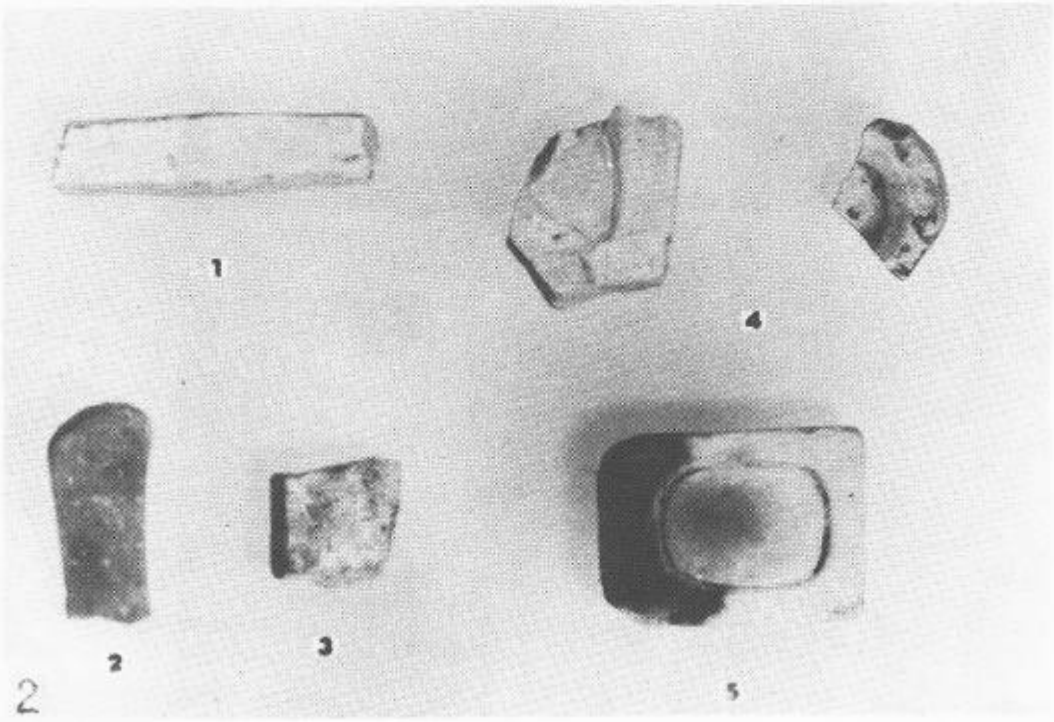


写真　第３図

金属品及び石製品





1. 2. 3.　砥石

5.　　硯

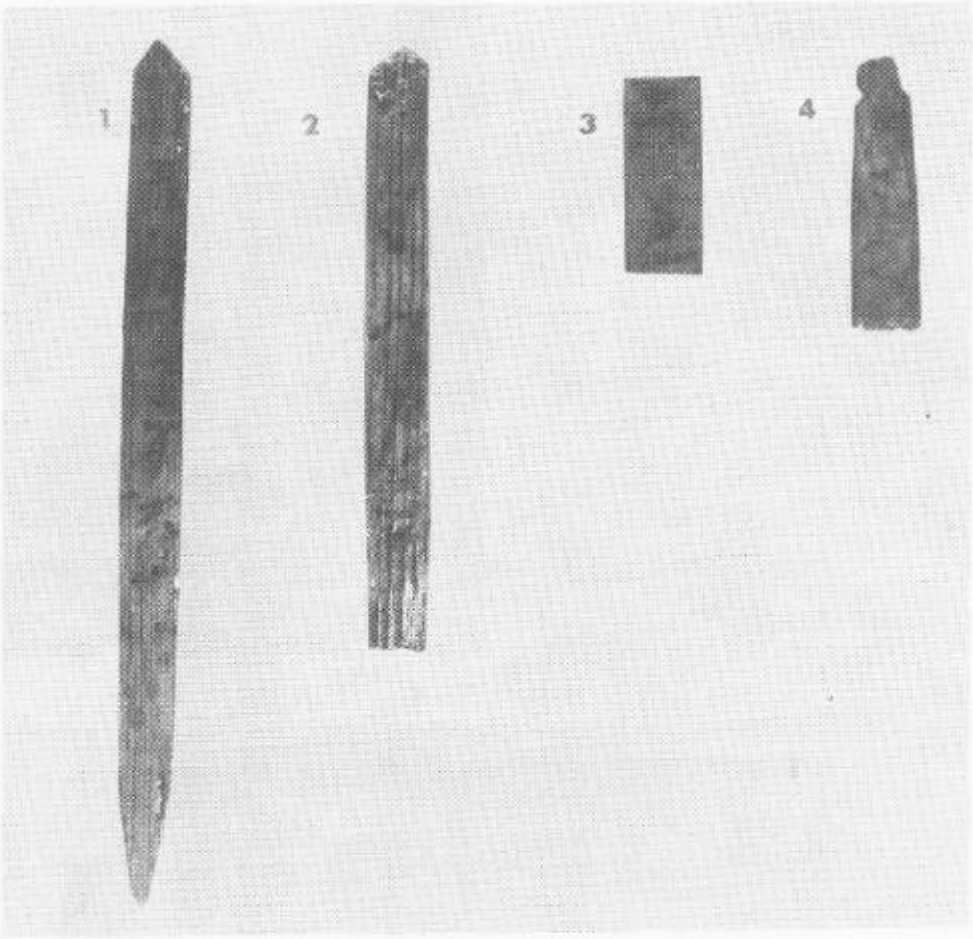



写真　第4図　墨　　書